

湯路を歩き、お湯見小屋を巡る ～温泉資源を利用した周遊型観光施設の提案～

1181003 松林幸佑

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

1. はじめに

私の出身地である有馬温泉は日本三古泉の1つであり、約1300年の歴史を持つ温泉地である。街には、温泉が湧き出る泉源が数カ所あり、そこからの湯けむりが街に立ち込めている。また、現在の街には豊臣秀吉が行った街の整備の面影が古くから残る路地などに残っており、それらは街を歩くことで感じることができる。しかし、現在の街の取り組みを見てもそれらの観光資源をあまり有効的に活用できておらず、もったいなく感じていた。

2. 対象敷地

対象敷地は、兵庫県神戸市に位置する有馬温泉とする。ここは六甲山の北側の紅葉谷の麓の三峠にあり、温泉街の標高は350mから500mに位置する。街は東西南の三方山に囲まれており、すり鉢状の地形をしている。また、細い坂道や路地が多く、古い街並み(写真-1)や神社・お寺など歴史的建造物も残っている。

外湯は、「金の湯」(写真-2)と「銀の湯」があり、ここは休日になると六甲山からの下山客や地元客でにぎわう。「金の湯」は、古くから有馬温泉の元湯として現在の場所に建っており、街のランドマークとして観光客の動線の中心となっている。

また、温泉が湧き出る泉源が街に点在しており、泉源からは湯けむりが立ち込めている。



写真-1 湯本坂



写真-2 金の湯

3. 対象敷地の歴史

3-1 有馬温泉のはじまり

有馬温泉のはじまりは、湯泉神社の縁起によれば、

泉源を最初に発見したのは、大己貴命(おおなむちのみこと)と少彦名命(すくなひこなのみこと)の二柱の神であったと記されている。その後、天災の度に街が衰退するが、行基上人や仁西上人らによって復興する。

3-2 有馬温泉と豊臣秀吉の関わり

有馬温泉に初めて豊臣秀吉が訪れたのは、記録上では1583年8月で、その後約10回有馬温泉を訪れている。1586年には泉源の改修、浴場の改築と大規模な改修などを行う。また、街の中心部である現在の湯本坂付近を流れていた六甲川を埋めて現在の位置に架け替え、街に新しい道(図-2)を建設した。このことで、街には新しい人の流れが生まれた。六甲川の跡地は現在湯本坂という通りになっており、土産物屋などが建ち並ぶ観光客でにぎわいの空間となっている。



図-1 六甲川の変化

4. 街の調査

4-1 現地調査

9/28、10/10、12/8、12/30の計4回の現地調査から、街の特性の読み取りを行い、良点と問題点、また街の特徴の抽出を行う。

○良点

街を歩くと至る所に古い建物やお寺、神社(写真-4)

が残っている。また、温泉地ならではの旅館(写真-5)や温泉が湧き出る泉源が街中に点在しており、それらが温泉地としての風景をつくりだしている。



写真-3 極楽寺



写真-4 ホテル花子宿

○問題点

街全体に細い路地が通っている。しかし、整備されていない路地(写真-5)が多く、人通りも少ない。また、良点として挙げた泉源(写真-6)にも、周辺が整備されているものと、整備されていないものがある。



写真-5 路地



写真-6 御所泉源

○街の特徴

低層の建物が多いため、屋根が連続する風景や、大規模住宅が少ないため小さな小屋が建ち並んでいるような街並みが生み出されている。また板張りの塀などが古い建物などで見られる。人の流れは、湯本坂など人通りが多い通りをオモテの空間、路地など人通りが少ない通りをウラの空間となっている。

4-2 ヒアリング調査

有馬温泉の旅館関係者や建築活動をされている方々にヒアリング調査を行った。その結果、様々な情報から以下の3点に着目する。

- ・有馬温泉の街全体に通っている路地は、豊臣秀吉が整備したものが多く、道がクランクしている。
- ・泉源は、金の湯(金の湯が建っている場所から自噴する泉源がある。)以外は昭和に入ってから新たに掘削さ

れた。

- ・現在人通りが少ない路地は、かつてはメインの道として使われていた。

5. 着目する要素

5-1 泉源

泉源には整備が行われている場所(写真-7)と行われていない場所(写真-8)がある。また、泉源に鉄塔やお湯を貯める湯たまりがあり、これらの観光資源を利用し、泉源周辺の整備を行う。



写真-7 整備が行われている泉源



写真-8 整備が行われていない泉源

5-2 路地

街を通っている路地の多くは、折れ曲がった道や石垣など、古くから残っているものが多い。また、街の地形がすり鉢状をしているため、街を見下ろす位置を通っている路地(図-2)が多く、街を見渡すことができる(写真-9)。

泉源も路地沿いにあることが多い。また、温泉を泉源から旅館やホテルへ送るための配管も路地に沿って通っている。



図-2 路地の位置



写真-9 路地からの眺め

6. コンセプト

6-1 方針

有馬温泉では、泉源が配管で他の泉源やホテルとつながっており、その配管が街のウラ側である路地を通っている。泉源とホテルが配管というネットワークで結ばれ繋がっているように感じた。そこで、泉源と路地

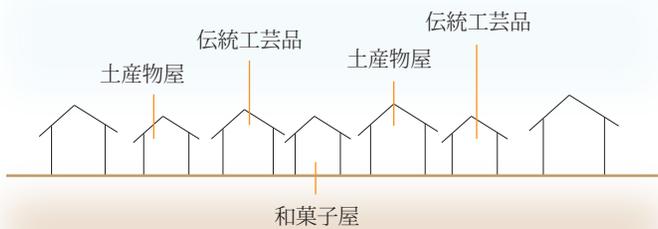
の関係性を活用し、金の湯を拠点に泉源に小さな小屋（お湯見小屋）をつくり、それらをつなぐ道（湯路）として路地の整備を計画する（図-3）。



図-3 湯路とお湯見小屋の関係

6-2 湯路

泉源と泉源をつなぐ道として整備されていない路地を「湯路」（とうじ）として整備する。湯路は、路地を通る温泉の配管に沿って設定する（写真-12）。また、路地沿いに存在する整備されていない空き地に、温泉を利用した工艺品（金泉染など）やお店を計画し、ウラ側だった路地空間をオモテ側へと変えていく。



街のオモテ側には温泉を利用したお店が少ない。



路地沿いの空き地に温泉を利用した工艺品やお店を計画。

図-4 路地沿いの空き地活用のダイアグラム



写真-10 湯路の模型写真



写真-11 湯路の模型写真

6-3 お湯見小屋

泉源のそばに建つ小さな小屋をお湯見小屋（おゆみこや）を計画する。泉源からは湯けむりが立ち込めているが、温泉自体は見るができない。そのため、お湯見小屋内に足湯を設置し、泉源の湯けむりを見な

がら温泉を体感する。また有馬温泉の泉源は、それぞれ質感の異なる鉄塔が建っているため、それらの要素も建築に取り入れ、場所性を考慮しながら各泉源で計画を行う。

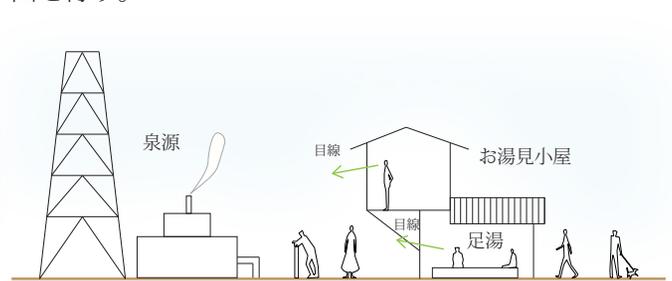


図-5 泉源とお湯見小屋の関係

6-4 元湯

現在の元湯は近代的な建物で、温泉街の景観破壊にもつながる。そこで、温泉街に似合った元湯へ現在の建物をベースに改修を行う。また、湯路のスタート地点としても整備する。

6-5 コモンデザインについて

敷地が複数あり、それらをつなぐ道も長いため、統一のデザイン要素をそれぞれの施設、道で使用する。統一のデザイン要素を持つ施設と道を街に展開することで、街という広い敷地の中にとっても長い廊下を持つ建築が展開されているような風景を生み出していく。



図-6 全体のデザインについて

7. 提案内容

7-1 金の湯

有馬温泉の中心にある金の湯を湯路のはじまりの場所として現在の姿を元に改修を行う。広場を合わせ持った元湯として設計を行っていく。温泉としては、3Fに新たに家族風呂を付け加え、また湯けむりが立ち上るように湯気抜きを街側に設ける。



図-7 金の湯の1F平面図(1/400)



写真-16 妬泉源



写真-17 模型写真

7-2-3 極楽泉源

極楽泉源は、温泉寺や極楽寺など古から残っているお寺に囲まれた場所にある。敷地の高低差や泉源から出る湯煙が鉄塔の上から出ていることから、泉源よりも高い位置にお湯見小屋を計画する。



写真-18 極楽泉源



写真-19 模型写真

7-2 お湯見小屋

街に点在する泉源の横に計画する。対象の泉源は、天神泉源、妬泉源、極楽泉源とし、御所泉源は泉源周辺の整備を計画する。

7-2-1 天神泉源

天神泉源は天神神社の境内にあるため、泉源の前に神社の社務所がある。その社務所を2Fにお湯見小屋が併設された建物への建て替えを計画する。この敷地からは有馬温泉を一望できるため街を眺めることもできる。



写真-12 天神泉源



写真-15 模型写真

7-2-2 妬泉源

妬泉源は、オモテの空間となっている湯本坂から少し入った細い路地に面してある。そのためお湯見小屋の敷地も狭く、泉源の鉄塔との距離が近い。2Fの展示スペースからは、有馬温泉の低層住宅の屋根が連なる景色を眺めることができる。

7-2-4 御所泉源

御所泉源は、泉源からは建物の汚れた外壁などが見えるため、泉源周辺に板張りの塀などを設置し、泉源周辺の景観を整備する。

7-3 湯路

連続する杉板の塀で道をつくり、泉源と泉源をつないでいく。板張りの塀によって道の統一性がうまれる。



写真-20 模型写真



写真-21 模型写真

8. まとめ

街に点在する泉源をつなぐ新たなネットワークを考案し、歴史を感じながら街を巡る新たな人の流れをつくる。多くの人が街に溢れ出し、街全体の活性化を促す周遊型の観光施設を提案を行った。